

## 「ハロウィンって？」

「彼らのなきがらは安らかに葬られ その名は子々孫々に至るまで生き続ける。」

(聖書協会共同訳 シラ書 44:14)

10月31日は「ハロウィン」です。お店にはハロウィンの商品が陳列販売されて年々市民権を得てきている感じがします。

ハロウィンとって連想するものは何でしょうか。「かぼちゃ」「仮装行列」「おぼけ」などでしょうか。ハロウィンは一言でいうと日本の「お盆」のようなものです。「ハロウィン」は別名「オール・ハロウズ・イブ」とも言われます。ハロウズは聖なる人という意味です。つまりキリスト教の聖人を祝う「オール・セインツ・デー」(諸聖徒日11月1日)の前夜祭がハロウィンです。

キリスト教のお祭りではクリスマスやイースターが良く知られていますがどちらも「クリスマスイブ」「イースターイブ」とって前夜祭が行われます。それと同じで「オール・セインツ・デー」という大切な日の前夜祭としてハロウィンがあります。(教会暦には実際にはありません。) 言い伝えによるとハロウィンは「古代ケルト」と「古代ローマ」そして「キリスト教」の3つの文化が融合して生まれたもので、古代ケルト文化の言い伝えによるとケルトの1年は11月1日～10月31日までで10月31日は大晦日にあたり、この夜はちょうど日本のお盆と同じように死者の魂が家に戻り、恐ろしい災いをもたらすと考えられ、人々はこの災いを回避するために、食べ物を集めて捧げ物を準備し、大きなかがり火を焚いて霊を追い払おうとしたそうです。

そして翌日聖人たちの魂がこの大きな災いから救ってくださると信じていたようです。この習慣が変化して今では子どもたちがお化けの仮装をして家々を回ってお菓子をもらうという行事に変化したようです。

現代ではハロウィンの宗教的意義は薄れてしまったのは残念ですが、ハロウィンは、11月1日の「オールセインツデー」の前夜祭であるということを知って頂ければと思います。

さて、キリスト教の暦では、「オールセインツデー」日本語で言えば「すべての聖人の日」

「諸聖徒日」は、大切な日であり、翌日2日、すべての亡くなった人々の魂のために祈る「オールソウルズデー」(諸魂日)です。盛岡聖公会でも毎年、諸聖徒日に近い日曜日に逝去者記念礼拝を行い、墓参の祈りを行っています。今年は10月31日(日)に予定されています。

キリスト教にはもちろん「祖先崇拝」ということはありません。亡くなった人、死者を神として祭ることは、決してしません。しかし、「感謝する」、そして「記念する(覚える)remember」ということには、キリスト教的なとても深い意味があります。わたしたちは自分だけで生きているのではない、今いるわたし、わたしたちだけが孤立した存在なのではない、「過去—現在、そして未来」という大きな生命(いのち)の繋がりの中に、今、自分も、世を去った者も、今なお世にあるわたしたちも、すべて神様の中で結ばれているのです。

宗教学者の山折哲夫さんという方が「生きている者だけの人間関係というのは狭く硬直化してしまう。生きている者と死んだ者との間にも対話や連帯のパイプを通すことが、深みのある人間関係を作る」、ということをおっしゃっています。

キリスト教の「一つの伝統」としてのこの日は、わたしたちに生と死を含めた人間の存在の全体を深く見るようにと、勧めているように思うのです。

どうぞキリスト教の暦の中には「オールセインツデー」、「オールソウルズデー」という大切な日があるということ覚えてくださればと思います。

(司祭 越山哲也)

